
とある悪魔と超電磁砲

サガ大好き

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

とある悪魔と超電磁砲

【Nコード】

N9906P

【作者名】

サガ大好き

【あらすじ】

悪魔と少女と超電磁砲とが会った時………奇跡が………起きない

第一話 プロローグ（前書き）

バージル兄貴ファンの方々本当にすみません

不快になる恐れがありますので、ご注意ください

少しでも不快に感じた方はご辞退頂いた方が良いでしょう

第一話 プロローグ

(・・・・・・此処は、何処・・・・だ？)

土砂降りの雨の中で、蒼いコートを纏う彼がそう思った時にはもう既に手遅れだった

ビルの隙間を縫う様に敷かれたコンクリートの道路
人間共の造った毒々しい照明の色、乱立するビル群

そして道路に横たわる己の体

懐からは、塗れた感触が返って来る

視線を向けると、己の血が自分を中心に水溜りを作っていた
出血と雨によって奪われた体温が、容赦なく体にフィードバックした

(体が、動かん・・・・・・)

体が動かない

間違い無く以上の二つの要素の所為だろう

しかし、彼は焦る事も無ければ。死に恐怖する事も無かった

弟を否定し、弟に否定され。戦い、敗北した

そして落ちた先で魔帝に破れ、彼は己を消された

意思を黒く塗り潰し、魂さえも掌握する様な術

その影響により、彼は人形となった

そしてその状態で弟ともう一度戦い、敗れた。”二度も”弟に敗れた

しかし悔いは無かった

偉大なる父が選んだのが、弟だった

それだけの事

弱者は淘汰され、強者は栄華を極める

当然の事だ

それだけの事に、いちいち目くじらを立てる気も無かった

後は、弟が最後まで出来たのか。それが気になるだけだった

「・・・・・・・・・・」

とうとう睡魔が襲ってきた

迫ってくるそれに抗えず、瞳を閉じる

しかしその時

「大丈夫ですか！？ 死んじや駄目なですよー！」

耳障りな声が聞こえてきた

少し舌足らずな、成熟していない女性の声

男が気だるそうに目を開けると、血に焦ったのか。ピンクの髪のがキが、狼狽しているのが見て取れた

何やら先程から仕切りに携帯電話に向かって話し掛けている助けでも呼ぼうと言うのだろうか？

しかしあるう事か、男は少女を目障りだと思った

少し考えてから、幻影剣を宙に出現させようとしたが・・・・・・・・無理だった

幾ら念じても、祈っても。呼吸の様に出来ていた己の魔が発動しない

「ああ！ 血！ 血が、止まらないのですよ！」

少女が、いよいよ深刻な事態になってきた事を感じ取ったのか
いよいよ焦りだした

（黙、れ・・・・・・・・人間・・・・・・・・）

しかし男は、少女の気遣いを心の中で一蹴する
”人間”

彼は知らず知らずの内にそう吐き捨てていた

しかしその事に気が付かず、いや、知っていてなのか
それだけ考えると、少女に無視を決める事にしたのか目を再び閉じた
しかし暫くそうしていると、体に妙な浮遊感を感じた

「・・・・・・・・・・？」

目を開けると、自分の鼻先に、ピンクの髪が押し付けられていた
周囲を確認する為に視線を巡らせると、どうやら少女に抱えられて
いる事が解った

しかし少女の身長では、長身の男を引き摺るのがやっとで下半身は
地に付けられていた

男の血に塗れるのも気にせず、血塗れの少女が男に必死に呼びかける

「大丈夫なのですか？ 死んじや。駄目なのですよー！」
（何の・・・・・・・・つもり、だ！）

そんな献身的な彼女だったが。しかし男は激昂すら覚えた
”人間” その弱い存在に助けられるのが気に食わなかったのだ
しかし思いとは裏腹に、体は動かない
何度試しても剣は出現しない
どうしようも無かった

しかしそんな男の思いを他所に、遠くに病院が見えてきた

「大丈夫ですよ！ もう見えてきたです！」
（離・・・・・・・・・・せ）

男は心の中で必死に抵抗しようとした
人間に施しを受ける位なら、彼は死を選ぶ
それだけの覚悟はあった

しかしそうしている内にも、少女の足は休まらなかった
入り口が、段を追って大きくなってくる

何とか打開策を見つけようと視線を漂わせると、人間共の作った毒
々しい照明が目に入った

すると何故か、昔ある男から聞いた言葉が浮かんできた

——人が魔の存在を知って恐れるのは良い

そう

だからこそ人は無理をして魔を。闇を跳ね除けようとする
その為の照明、その為の灯りだろう

——だが

この話には続きがある

それこそが彼の最大の懸念だった

——しばしば人は魔に見入られる

ならば”自分”を救おうとするこの少女は……………一体何なの
だろうか？

そう考え終えると——彼は意識を失った

第一話 プロローグ（後書き）

兄貴助けたの小萌先生です
姫神さんがあっちに居るし、良いかなと思って書きました

第二話 MISSION 2

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

目に差し込んでくる淡い光と、腹に掛かる重圧で。男は目を覚ました
上体を起こすと、何かが落ちた感触がした
そしてズレた何かは、今度は手に乗っかってくる

「う・・・・・・・・ん」

そして声すら発した

その反応に男は確信する。声の正体は人であると

そして見る為に首を向けると。案の定

自分を助けた子供が、椅子に座り、頭をベッドに預けつつ。惰眠を
貪っていた

自分を看病していたか、それとも心配で見に来たのだろうか？

「・・・・・・・・・・フン」

何れにせよ余計な事だ

そう内心で毒づくくと、体を持ち上げ、自身に巻かれていた包帯を乱
雑に取り払った

包帯を取り払うと、彼の均整の取れた体に刻まれた。多くの傷が露
になった

腹部を大きく真一文字に切り裂いた敗北の証

魔帝に刻まれた服従の証

それら全てが、彼にとって屈辱を思わせるものでしか無かった

其処で一旦思考を止め、ベッドから降りる。——少女の頭がベ
ッドに落ち、瞳が数度動いた

しかしそれを気にする事無く、ハンガーに掛けられていた自身の衣服を手にとると。

着替えつつ、周囲を見回す

白で統一された清潔感のある室内に、周囲に等間隔に配置されたベツド

それに自身の状態から鑑みるに、どうやら今自分が居るのは。人間の言う所の病院という施設の様だった

念の為、体を数度動かしたり。血の気を確かめっていると。自身の無事は確認できた

(・・・フン、理解出来んな)

彼がその行動を取った理由は至って簡単に他人が信用できなかったのだ

見ず知らずの相手を、無償で必死になって助ける少女その行動の意味が、彼には理解出来なかった

続いて、彼は部屋の通用口を確認すると。そちらに向けて歩き出すそして今正に部屋を出ようと差し掛かった時

——カエル顔の男が其処に居た

「やあ、傷はもう良いのかい？」

身に付けた白衣と、この言葉から察するに。

男は彼を医者であると判断した

適当に返事を返すと、続いて質問を返す

「あれは・・・貴様の差し金か？」

「ああ。と言っても応急処置程度の事しかしていないのだけだね。どういう”能力”か、君の体は治りが異常に速くてね。

メスも通りそうに無かったので。そうさせて貰ったよ」

「・・・・・・・・・・」

能力

こんなものは生まれつき備わっていただけだった
言葉を不快に思いつつ、男の横を通り過ぎる

「何処へ行くんだね？ 君はまだ・・・・・・・・」

「貴様には関係・・・・・・・・」

「ううん・・・・・・・・」

直後、男に肩を掴まれ。呼び止められる

その心配すらも不快に思い、彼は力エル顔の医者の手を振り払おう
とし。押し問答になりかけたが

その時——少女が目覚ました

「うう・・・・・・・・うん？ ああ！ 目を覚ましたですか？」

頭を持ち上げると、目を数度指で擦り、彼の姿を確認すると共に此
方に駆け出して来た

只、自分を見る少女の瞳が輝いているのが。どうも自分には理解出
来なかった

「もう立ち上がったても良いのですか？ 傷の具合は・・・・・・・・」

「黙れ。貴様には関係無い事だ」

取り付く島も無く

男は歩きながら。心配する少女をも一蹴した

何故だろうか

何故かこの少女には余り関わる気がしなかった

「駄目ですよー、そんな態度じゃ。将来困るのです！」

しかし少女は彼に関わろうし、救おうとする

何故なら彼女はその職業に誇りを持っているからだっ

ピンクの髪に同じく桃色の衣服

それに見合わぬ煙草の匂いを体から発する、少女の名前は月詠小萌と言った

彼女の職業は所謂聖職者。丁度”彼位の”歳の人間を救うのが仕事だ彼を助けた理由にも複雑な事情など無かった

目の前に死にそうな者が居れば、彼女は自身の誇りに掛けて救うソレが、彼女の職業だからだ

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

やはり

彼は小萌を無視する事にした

しかしそれでも

「色々聞きたい事はあるのですが、それじゃ先ず名前からですよ。私は月詠小萌。貴方は何て言うんです？」

それでも、小萌は彼に関わろうとした

何故ならば、小萌は彼を非行に走った未成年と見たからだ

しかし彼女は、重大な勘違いをしていた

彼は、もう既に立派な成人男子だ

だから彼は実はもう既に彼女の守る対象から離れているのだが

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「ほら、黙ってちゃ解らないですよ！ちゃんと話さないとい・・・」

しつこく話し掛けてきた

正直鬱陶しいのだが、暫く歩くと彼は思い出した様に。少女に応じる

「・・・・・・・・・・バージル」

「バージルちゃんですか！ 良い名前ですねえ！ それじゃあ今度
はあんな所で倒れていた訳・・・」

「今度は此方から、質問がある」

バージルが短く答えると、小萌は嬉しそうに捲くし立てた
しかしそれすらも遮って、バージルは疑問を投げかける
答えた理由も、先ず黙らせる為だったに過ぎないからだ

「此処は・・・・・・・・何処だ」

「・・・・・・・・・・と、いう所なのですよ」
「・・・・・・・・・・」

少女の説明が終わり、バージルは顎に手を当てて。何か考え込む仕
草を見せた

言語からある程度想像できては居たが、此処は日本の学園都市とか
いう所らしい

だが、何故？

何故、自分は此処まで吹き飛んだのだろうか？

自分は魔界に居て、弟に斬られて。其処から意識が途切れたので良く覚えていないが

しかし其処まで考えた所で、現実引き戻された

「はい、ちゃんと答えたのですよ。今度は再びコッチの番です」

もう何回聞いたか。少女の妙に高い声

見た目を考えれば、当然なのだが彼女は教職に就くほど歳を食った淑女なのだ

最も、そんな事を気にしない彼女にとっては。彼女の声など耳障りなものでは無かった

「どうして、あそこで倒れていたのですか？ 一体何をしていたのです？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

必要な情報は全て聞き出したと判断したバージルは、少女を無視し。再び歩き出した

少女は彼の背を追うが。やがて病院のガラス張りの入り口を抜けるとバージルはその姿を陽炎の様に消した

「ああ！？ 何処へ行くのですかー！？」

手を伸ばした時には既に遅く

遠くを見ると、バージルが高層の建物を飛び交っていた

それを能力によるものと判断した彼女は、対して驚きはしなかったが変わりに確信していた

「何時でも、頼ってくるのですよー！」

”バージルが学園都市の関係者だという”自身の勘違いを

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

乱立する建造物の群れを飛び交いながら、バージルは一人考えた
先程の小萌の言葉を

その意味を

しっかりと聞こえてはいたが、それに答えられなかった

——何処へ行くのですか！？

その言葉に一瞬の迷いが見られたが。やがて吹っ切れた様に足を止
めると

建物と建物の間の路地に着地した

其処は朝だというのに薄暗く、光を遮るのに最適だった

（決まっている・・・・・・・・）

そしてゴミの散乱した大地に足を着けると。彼は顔の前で拳を握った
そう、確かに決まっている

解りきっていたと言っても良いだろう

閻魔刀もベオウルフも、彼は全てを失った

ならば、諦めるか？

復讐を

”奴”の喉に剣をつき立てる事を諦めるのか？

「力を・・・・・・・・！」

答えは否

断じて否だった

可能性や自身の状態。又、自身に出来る事

あらゆる要素を度外視して、彼が辿り着いた答えは。やはり此処だった

ベオウルフや閻魔刀が無いと、戦え無いのか？

” 奴等 ” に勝てないか？ ならばそれは何故だ？

答えは簡単

弱いからだ

自分はどうしようも無く弱かったからだ

弱いから—— ” 奴 ” に敗北した

弱いから—— 弟にこの身を刻まれた

弱いから—— 己の意思すらも消された

そして何よりも弱かったから……

—— ならばどうする？

これから如何すれば良い？—— その答えは、先程言った筈だ

ならばもう一度だけ言おう

そう。 ” 決まっている ”

強くなればいい

誰にも負けない位に強く

圧倒的な力を

誇り高いスパイダの力を

己の物とすれば良い

「 更なる力を！ 」

そう魂に誓った

第二話 MISSION 2（後書き）

兄貴どうだったでしょう

スイマセンが大幅に書き直させて頂きました

第3話 MISSION 3 (前書き)

遅くなつてすみません
だって鬼怖いんだもの

第3話 MISSION 3

丁度昼時に差し掛かった頃であろうか？

燦々と照りつける太陽に目を細めつつ、バージルはダークグレーの車道を一步一步踏みしめて歩いていた。

周囲には女子中学生が数人と、親子連れがはしゃいでいる。

それらに一瞥する事すら無く、体の感覚を確かめる様に。歩く。

（やはり．．．．．以前の様にはいかんか）

何度目になるか解らない舌打ちと共に、バージルは自身の動作に不満を漏らした。

一々全力を出さずとも解る。

今の自分は．．．．．弱い。

身体能力も、魔力も、以前の自分とは比べられない位に落ちている。それでも人間を殺す分には問題は無いだろうが、” 奴等 ” には到底届かない。

奴等には敵わない。

「．．．．．」

舌打ちを、重ねる。

ソレと共に、腕に少し魔力を集中させてみる。

自身の武器であった一つを出現させる為だ。

しかし——時を同じくして。

——ドオン！

20 m程前方にあった店が——爆ぜた。

ひしゃげたシャッターに纏わり着く様に、濛々と立ち込める黒煙。明るいオレンジ色の炎。

そして奥からは、黒い影が3つ程出てくるのが見えた。

状況を見るにテロか、それとも強盗か。

面倒に巻き込まれるのは御免だが、今は少し試したい事もあった。

この状況で、彼の選ぶ道は――

少女は、苛立っていた。

少女は、憤慨していた。

愛しの”お姉さま”との時間を邪魔された私怨に。

目前の悪事に対しての義憤に。

だから――少女はコンクリートの地面を蹴って、飛び出していた。

腰掛けていたベンチを飛び越え、舗装された道路を蹴る。

ツインテールの髪は風に揺られて、ゆらゆらと揺れていた。

そして最後にガードレールを飛び越え、

「お待ちなさい！」

ブレザー調の制服に巻きついた腕章を見せ付ける。

其処には――こう書かれていた。

「”ジャッジメント”ですの！」

少女の名を――白井黒子といった

拉げたシャッターの中から、三人の男が同時に飛び出した。痩せぎすの男、肥満体の男、その中間くらいの程よい体型をした男と、三人共背格好はそれぞれに違う。

だが、それ以外は全て同じだった。そう、全てだ。

黒いジャンパーとtシャツにジーンズ。

正体を隠す為であろう口元の白いマスク。

それに銀行から一秒でも早く逃げだそうと言う行動。

事実、今も歩道に乗り出しその足を前へと進めている。

極め付けに、肥満体の男が手に持つ、何かがパンパンに入ったバッグ。

これらの情報から、彼等を強盗犯と断定するのにそう時間は掛からなかった。

「オラ！　グズグズすんな！」

リーダー格の男が、二人を鼓舞する様に叫んだ。

後の二人も彼の後に付き、逃げる様に前へ進んでいる。

「さっさとしねえと！・・・・・・」

「お待ちなさい！」

更に鼓舞を掛けようとした所で、彼の前に人影が現れた。

「ジャッジメントですよ！」

一瞬、呆気にとられた。

ブレザー調の制服に身を包み、紺のスカートを履き、白のソックス

を足に通す、茶のツインテールの少女。

その姿を一見しただけで、お嬢様だと解る気品があった。
学び舎か、はたまた社交界か。

そんな所であれば、この格好でも正しいのだろう。

だが、今少女が相對しているのは紛れも無く罪を犯した者達だ。

その三人に立ち向かうには、この少女一人は余りにも——場違いに思えた。

例え、風紀委員の腕章を身に付けていたとしても。

「はっはっはっはっはっは！」

三つの笑い声が唱和された。

「何だよこのがき！」

「ジャッジメントも人手不足か!？」

どうやら三人共に考える事は同じだったらしく、腹から来る愉快さを隠そうともしない。

痩せぎすの男と、中間の男が飛ばす野次にも少女は涼しげな顔で流すだけだった。

「お嬢ちゃん、さっさと消えねえと……」

肥満体の男が、少女に近付いていく。

下卑た笑みを浮かべ、バッグを持っていない方の左手の手つきから妙な事を考えているのが容易に想像出来た。

「痛い目見るぜえ！」

そして左手を伸ばし、少女に掴みかかる——事は無く。

「そういう三下の台詞は……」

男の左手は虚しく空を斬るのみだった。

少女が体を回転させると、男は少女に無防備な横顔を晒した事になつてしまう。

「死亡フラグですよ」

無防備な下半身に、足払いを掛けると少女は男の腕を掴んで少し前に力を掛けた。

それだけで男の体は宙を舞った。

重力の法則に負け、男は地面に背から落ちる。

「ガはあ！」

空気を吐き出し、男は白目を向いた。

口元から泡を噴出し、時折体を痙攣させるその姿に人の意思は見受けられなかった。

「……ああ!？」

「てんめえ……!」

リーダー格の男が、手元に炎を生み出し思い切り振りかぶった。

彼としては、獲物を倒した所を狙い上手く隙を突けた気になったいたのだろう。

流線型を描く炎が少女を飲み込みまんとしていた……が。

「不つ細工で単調な攻撃です事」

悲しいのは、少女の方が彼よりも圧倒的に上だったことだ。
経験も、実力も、その能力でさえも。

不意に背後から声が聞こえ、気付けば衝撃が後頭部を襲っていた。
硬い厚底靴の感触が、いやにハッキリと解った。

「ぐう！」

先程の衝撃で前に数歩よろけつつ歩き出すと、軽い脳震盪に耐え切れず彼はそのまま倒れこんだ。
すかさず少女が男の前に瞬間移動をし

カン！ カン！ カカン！

太股に仕込んでいた鉄矢を、男の服に次々と打ち込んでいく。
脇腹、腕、足、動きを封じる為だけの物ではあったが。

「テ……瞬間移動能力者！」
テレポーター

男に自分の能力と、恐怖の記憶を植え付けるには十分過ぎる効果があった様だ。

瞬間移動。それこそが彼女の能力だ。

己の服と道路を縫い付ける役目を担っている鉄矢を忌々しげに見ると、続けて黒子に視線をスライドさせた。

すると先程の少女が、鉄矢を右手に持ちつつ笑っていた。

「これ以上抵抗するなら、次はコレを体内に直接テレポートさせますわよ？」

誰が聞いても、ハッキリとした脅しだと解った。
その台詞を最後に、男の目から気力が失せた。

「ヒ……!」

残された瘦せぎすの男は、彼に出来る事と言えば。

蜘蛛の子を散らすかの如く、仲間を見捨てて逃げる事のみだった

「うわあああああ!!!!!」

今は、何も考えず、前へ、前へ。

そうしないと殺される、男の中ではソレくらいの気持ちであっただろう。

だが、瞬間移動能力者が相手なのだ。

走って、逃げられない事位少し考えれば解る。

しかし……彼の目の前を——一人の少年が横切った。

「ああ!?!」

これしか無いと思った。

最悪の考えではあるが、破滅よりはマシだと思った。

少年を人質に取ると言う考えが。

そして目の前の少年に手を伸ばし

「丁度良い、一緒に来い!!」

「何お兄ちゃん? 誰?」

連れて行こうとした所で

「駄目エーーーー!!」

圧力が加わった。

反対の方向に、ハッキリと解る位の力で。

視線をスライドさせると、セーラー服の腰まで長髪を垂らした少女が少年にしがみつく様に引っ張っているのが解った。

少女の名は佐天涙子。

学園都市の中では、所謂無能力——レベル0の烙印を押された者である。

だが、それでも、少女はそれを盾に、何もしない存在にはなりたくなかったのだ。

負けるとしても、傷付いても。

「何だお前！ 離せよ！」

男が少年を引っ張る力を強める。

しかし、大事そうに少年を抱えるその腕は中々に動かなかった。

両腕と片腕の勝負になっているのだ、しかも少年の重さも加わった。こうなると引き離すのには、時間が掛かるだろう。

「・・・・・・クソッ！」

「っ！」

仕返しの代わりであろうか？

少年から手を離すと、変わりに少女の頬に蹴りを見舞った。

無力から来る悔恨の涙が横に流れ落ち、佐天は道路に倒れこんだ。

そして続いて男が背を向け逃げ出すと、道路の反対側に有る自家用の乗用車が男の目に飛び込んだ。

これは幸運だと男は進路を変え、乗用車に走りこんだ。

——ソレが間違いだったと知らずに。

急いでいて、気が付かなかったのであるう。

道路の間には、蒼いコートを身に纏った男が居た。

「どけえええ!!!」

しかし、男は道を譲る事を強要する様に、その男にさえ殴りかかった。

彼は蒼いコートの男を見て、異常性に気付くべきだったのだ。

例え、急いでいたとしても。

例え、冷静な判断が出来なかったとしても。

その怜悯な瞳の奥に隠された。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

他人の命を何とも思わぬ意思に。

バージルが選んだ道は、何もしない事だった。

人間など、所詮取るに足らぬ弱者だというのが彼の考えだった。

その人間相手では、碌な練習すら出来ないだろう。

それならば、その辺りで下級悪魔を探して相手している方がマシだとさえ考えた。

だからすぐ前で起きている喧騒も、歩道で争う男女も些細な事だと思っただ。

だから、このまま真っ直ぐに歩く事にした。

それで、十分だと思っただ。

どうでも良い存在と関わらない為には。

——その命知らずが出るまでは

「どけえええ!!!」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

ふと聞こえた叫び。

声の方に視線を向けると、先程の主犯格の一人であろうか？
痩せぎすの男が、拳を上げて此方に向かって来ていた。

だが、そんな追い詰められた男でさえも、バージルは如何でも良いと感じた。

——殺してしまえば、何も出来ないからだ。

バージルは男に一瞥をくれると、

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

軽く魔力を込めた。

——ずぶり・・・・・・・・

生暖かい血の感触。

鉄臭い液体の匂い。

「・・・・・・・・・・え？」

男が腹の方を見た。

浅葱色の剣が突き刺さっていた。
手で触ってみた。

赤い液体が大量に付いていた。

「何・・・・・・・・だよ、これ」

一瞬、何が起きたか理解出来なかった。
理解するのに数秒を要した。

自分は、彼に刺されたのだと。
バージルが目を細めると、浅葱色の剣は消滅した

「……アアアアアアアアアア！！！」

蓋の役目を果たした凶器を無くした所為で、鮮血が辺りに散った。
血の赤が容赦無く道路を汚し、男の下半身を濡らしていく。

男は半ば狂乱状態に陥った。

絶対の死の予感を感じ取った。

もう助からないと思った。

もう既に死んでいるのでは無いかとさえ思った。

「あ……………」

だから、そのまま後ろに倒れた。

白目を向いて、恐怖に凝り固まるその表情は哀れですらあった。

「キャアアアアアアアアア！！！！！」

不意に、叫びが聞こえた。

しかし、それらに意識を向ける事無くバージルは思考に没頭した。

（……………やはり出せん、か）

やはり出せない

以前よりも明らかに少ない。

それは、今出した浅葱色の剣に関する疑問だった。

今の一撃は、本来ならば男の全身を貫いて命を刈り取る筈だった。

だが———実際は違った。

本来ならば九本は出ていた剣は、一本しか出現していない上に、弱

者と罵る者の存在すら刈り取れていない現実。
明らかな弱体化だ。

「……フン」

しかし、それをさして気にする風でも無く。

バージルが男に止めを刺すべくもう一度剣を出現させようとした所で――一筋の閃光が走った

「……………?」

首を僅かに動かし、上半身を少し捻らせる。

それだけで閃光が彼の横を通り過ぎた。

同時に、閃光の飛んできた方向に視線を走らせる。

「……………つたく、さつきから胸糞悪い物ばっか見せてくれるわね」

少女が一枚のコインを手にし、此方に向かって喋っていた。

「……………何だ貴様」

「別に、只の物好きよ。覚えなくて良いわ」

バージルの呟きに答える少女は、確かな怒りを湛えた表情だった。己の獲物を奪われた事でも無く、彼自身に向けられた物でも無く。目の前で行われようとしている殺人を止めようと言う義憤に。

「こつちが先に買った喧嘩だ、とかそんな事はどうでも良いわ」
「……………」

「それ以上は、このアタシが許さない!」

「フン、だから？」

だったらどうした？

そついう意思を込めて、少女の言い分に返す。
許さない？　ならば如何する？

無力な人間が、何をするつもりだろうか。

「それ以上するんなら、あたしが相手になってやるわ！」
「・・・・・・・・・・ほう」

思ったとおりだった。

正義感に燃える人間には何度か会った事はある。

一々相手にしていられん。

その度に同じ事を思った。

そして今回もそうだった。

そう思い、少女の命を刈ろうと魔力を中空に込めた——その一瞬。

「・・・・・・・・・・！」

彼の頬から血が噴き出た。

突然の事で呆気に取りられる——訳でも無く。

彼は冷静に原因について考えていた。

直接の原因は、先程の少女の一撃しか考えられる事が無い。

しかし、自分が弱っているとはいえ自身に当てられた事は素直に賞賛してしかるべきだった。

知らずの内に、バージルは笑みを浮かべていた。

あの幼女から幾つか聞き出した単語。

学園都市。

能力者。

そしてこの少女の事。

成程――

「――This maybe fun・(少しは楽しめそう
だ)」

第3話 MISSION 3 (後書き)

バージル兄さんはかなり弱体化してます
後、何も言わずにおっさん刺したのは漫画でもやってたし・・・
良いよね？

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9906p/>

とある悪魔と超電磁砲

2011年11月13日10時00分発行